
愛は勝つ

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

愛は勝つ

【Nコード】

N7767C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

細長いひ弱な少年尚志。けれど彼は転校生に出会ってから何かが一変する。そうして遂に彼女のおっかないお父さんに会いに行き。愛は何よりも強い、それをテーマにしたお話です。

第一章

愛は勝つ

松本尚志は非常にひ弱な若者である。

ひよる長く痩せこけている。古い言葉を使うならばもやしっ子である。髪型も顔立ちも地味でそれが余計に彼を貧相なものに見せている。

もやしそっくりだがもやしとさえ呼ばれないこれには理由があった。

「もやしはあれで凄いなだ」

誰かが言った。実際にもやしというものは栄養があり栽培していても遅しい。そもそもが大豆なのであるからそれは当然と言えば当然である。

そんなもやしより弱いとされている彼の趣味は本を読むことと音楽を聴くことだ。その為文学や勉強にはかなり強い。しかし運動やそつしたことはからつきしであった。

格闘技なぞ考えたこともない。そもそも喧嘩とかそつしたこともしたことがないのだ。

「やっぱり僕はさ」

彼は通っている高校の図書館にすることが多い。そこでいつも本を読んだり勉強したりしているのである。この日もそつでクラスメイトと話をしていた。

「こつちの方がいいよ」

「いいんだ」

「うん。何かさ」

笑って述べる。笑ってはいるが達観した笑いであった。

「身体動かすの苦手だし」

「だから本を読んでいるだけでいいのか」

「そつだね。それで充分」

そう答える。その手にはサイエンス雑誌がある。

「それでもいいよね」

小声になるのは図書館の中にいるからだけではない。自分の言葉に少し自信がないのである。それが見える小声であった。

「別にさ」

「まあな。しかしよ」

クラスメイトの日下部真はここで彼の顔と身体を見た。濃い青の詰襟の制服からもそのひ弱な身体がわかる。実際に制服の下はガリガリの身体があるだけである。

「身体は少し位動かした方がいいぜ」

「わかってるけれどね」

力のない笑みで応えてきた。

「どうにも」

「どうにもかよ」

「うん」

やはり小声で力がない。その必要性は自分でも感じているようであるがそれでも嫌なようである。それが態度でもすぐにわかる。

「どうにかなるだろうし」

「まあ得手不得手には誰にもあるな」

「そうだろ？だから僕だって」

「けれどよ」

「ここで真はまた言う。」

「御前それじゃあ女の子にあまりもてないぜ」

これは冗談めかした言葉であった。しかし真実も語っていた。

「やっぱり女の子ってスポーツでできる奴に目がいくからな」

「短歌とか俳句じゃ駄目なんだ」

「駄目だろうな」

それはすぐに駄目出しされた。

「やっぱりよ」

「だけれどそれでもね」

「本当にそういうの嫌なんだな、御前」

「うん。否定しないよ」

それを自分でも認める。

「誰かさ、一緒に本の話とかしてくれる人がいたらいいんだけど」

「頑張つて探せ」

思いきり突き放されてしまった。

「そういう女の子をな」

「やっぱりそれしかないのかな」

「だってそうだろう？」

真は言う。

「好きな本だつて自分で見つけるしかないだろ？そういうことだよ」

「そういうことなの」

「それは自分で探せ」

真の言葉は突き放したものであった。

「それしかない」

「そういうものなんだ」

「当たり前だろう？出会いとかそういうのは大抵は自分で見つけるし

かないものさ」

「こうして図書館で本読んでもただじゃ駄目なんだ」

「まあそれでも見つかる場合はある」

言葉は少しあやふやなものになっていた。しかしそれでも彼は言う。
う。

「けれどそれでも見つけるのは自分なんだよ」

「何かよくわからないけれどわかったよ」

尚志は答える。要領を得ていない答えであったがそれでも答えたことは答えた。彼にはどうにもわかりにくい話であった。

それから暫くの間そのことについて考えていた。どうすればいいかという結論も出ないままであった。そもそもそれがどういったものかあまり、いや全くわかっていなかったのだ。

第二章

あれこれ考えるだけ考えながら日々を過ごしていた。今度はクラスで本を読んでいた。もうすぐホームルームの時間である。

「おう」

角刈りで威勢のいい感じの若い男がクラスに入ってきた。黒いジヤージを着ている。このクラス、つまり尚志の担任である岩村先生である。

彼がクラスに入ると皆席に着いた。それから朝の挨拶をしてホームルームをはじめるのであった。

「今日は皆にとって印象的なことがあるぞ」

先生はホームルームがはじまるといきなりこう言い出した。

「印象的なことって？」

「出会いだ」

先生は大きな、明るい声で言う。

「出会いがあるぞ。それはな」

「何なんですか？」

「皆待つてるぞ、来い」

ここで先生の左手の教室への入り口に顔を向けて言った。するとその扉がガラリと開いた。

そこから一人の少女が現われた。黒く長い髪をした楚々とした女の子であった。背は結構あって白い絹のような色の顔に眼鏡をかけている。

「おい」

「これはこれは」

クラスの男達は彼女の姿を見て声をあげる。黒く大きな目が目立つかなり可愛らしい外見だったからだ。一言で言うと文学少女であった。

「はじめまして」

女の子は教室の中央に来るとペこりと頭を下げてきた。

「矢吹若菜です」

後ろで先生がその名前を書く。そのうえでまた言う。

「これから宜しく願います」

にこりと笑ったうえで言葉であった。ここで名前を書き終えた先生が彼女の横にやって来た。

「矢吹君はこれからこのクラスの一員になるぞ」

またしても明るい声で述べる。

「皆宜しくな」

「わかりました」

皆明るい声で答える。特に男達の声は明るかった。まずは若菜は彼等に人気があった。その中には尚志もいた。

しかし彼は少し離れて見ているだけであった。内気な彼はどうしても彼女に近付くことができないのでしたのである。

近付くこともできず話をしようにもできなかった。しかし何時の間にか彼女の周りからは男の姿は消えて女の子ばかりになってしまったのであった。

「何か変だね」

尚志は自分の席に座ってその有様を見てふと呟く。その横には真が来ていた。

「矢吹さんの周りから急に男の子がいなくなったね」

「まあそうだろうな」

真はそれを聞いてさも当然であるというように頷いてきた。

「誰だつてな」

「何かあるの？」

「ああ、これがあるんだ」

真は答える。

「これがな」

「何かあるの？」

「矢吹さんの親父さんのことだな」

真はそれに応えて言う。

「皆引いてるんだよ」

「親父さん？」

「ああ、実はな」

真の言葉も警戒したものになった。尚志はそれを見て無意識のうち首を傾げてしまった。

「親父さんが滅茶苦茶強いらしいんだ」

「強いって」

「柔道八段らしいんだよ」

「柔道八段！？凄いね」

「おまけに空手七段で合気道五段、少林寺拳法は六段か」

それだけではなかった。話が洒落にならない方向にいつていた。

ここまで来ると何をしている人間なのかわからない程である。

「何その人、化け物みたいじゃない」

「だからだよ。何でもな」

「うん」

「矢吹さんが転校してきたのもそのせいらしいんだ」

「お父さんのことで？」

「ただ強いだけじゃないらしいんだ」

話はここで若菜に話に移った。

「娘に対しては凄い過保護らしいんだよ」

「そうなんだ」

「言い寄った男は全員投げ飛ばされるか拳の前に粉碎されてな。転校したのはストーカーしていたのがマジでボコボコにされたせいだったらしいんだよ」

「らしいの」

「ああ」

あやふやで根拠のない話である。こう書くと真実かどうかはわからない。しかし真実かどうかあやふやなのがかえって怖いのだ。本当ならばかえって怖くはないものである。本当であるかどうかかわか

らないのが一番怖いものだ。

「だから皆引いてるんだよ」

「そういう理由があったんだ」

「大変なことにな」

真も諦めた感じだった。どうやら彼も結構彼女に気が向いていたようである。

「とにかくあの娘はジョーカーだ」

「声かけたら駄目だつてこと？」

「そうなる。命は惜しいだろ？」

真の言葉はかなり真剣である。

「そういうものなのかな」

「少なくとも御前は止めておけ」

そう忠告する。

「プロレスラーでもなければ勝てないぞ。しかも一番強かった時機のアントニオ猪木でもなければな」

「ううん」

「わかったな」

念を押してきた。

「といつてもね」

尚志は考える顔で首を傾げさせる。

「僕彼女のことは何も知らないしね」

「それもそうか」

真はその言葉を聞いてふと気付いたように言う。

「彼女のことは何も知らないな。本当に」

「性格もどうなのかな」

尚志はそこに注目していた。

「可愛いじゃないか」

「いや、それよりもさ」

尚志はここで言う。

「性格じゃないかなって思うんだよ」

「おいおい、それはまた」

真は尚志のその言葉に思わず苦笑いを浮かべた。

「顔よりもそっちか」

「性格って出るよ」

尚志は少しとぼけていながらも迷ぐ。ピントがずれているように見えて見ればきものは見えていた。

第三章

「やっぱり」

「それはそうだけれどな。まあ御前らしいか」

真はそう述べて笑みを浮かべた。

「そういうところはな」

「うん」

尚志はまた頷く。

「それでさ。それで」

彼はさらに言葉を続ける。

「彼女のお父さんと揉めたら過ごそうだね」

「そうだな」

今度は真が頷く。彼等はここから何気ない日常会話に入った。この時まで尚志は特に若菜に興味があつたわけではない。しかしそれが急に変わる時が来たのである。

ある日のことであつた。尚志はこの日も学校の図書館で本を読んでいた。今読んでいるのは小説だつた。太宰治である。

「あれっ」

ここで女の子の声が出た。

「確か」

「んっ?」

尚志もその声に気付いた。声が出た右手を見るとそこには若菜がいた。にこりと笑つて彼女を見ていたのである。

「矢吹さん?」

「うん」

若菜は彼の問いににこりと頷く。そのうえで彼に問つてきた。

「それ太宰の本だよな」

「そうだけれど」

尚志は答える。

「この学校太宰の本揃ってるんだ」

「全集は全巻揃ってるよ」

また答える。太宰の全集はちょっとした学校ならばある。今でもそれなりに女学生に人気があったりするのである。

「他の作家のもかなり」

「いいわね、それって」

若菜は尚志のその言葉を聞いてにこりと笑ってきた。

「実は探してたのよ、本がじっくり読める場所」

「本が好きなの？」

「うん」

その言葉にも頷く。

「そうなの。この学校に転校してから暫く落ち着かなくてはじめてここに来たよ」

「ふうん」

「よかつたらね」

尚志に声をかけてきた。

「どんな作家のがあるのか教えてくれる？」

「うん、いいよ」

特に断る理由もなかった。尚志もそれに頷く。そうして彼は席から立ち上がったのであった。

「それじゃあこっち来て」

「そっちなのね」

「うん、そっち」

若菜に答える。

「全集があるところはね」

これが二人がはじめて話した時であった。それから二人は図書館で時々会うようになった。クラスでは話すことはないが図書館ではそれなりに親しくなってきた。話しながら少しずつ仲良くなってきた。

「ねえ」

この日も二人は図書館で隣り合って座って話をしていた。そこで森鷗外の本を読んであれこれと話をしていた。

「何かさ」

尚志が若菜に言う。本を見開いて話をしている。

「鷗外の作品って舞姫と高瀬舟じゃ全然違うね」

「そうよね」

若菜もその言葉に頷く。

「文章とかね」

「舞姫って読みにくいってどうかね」

これは確かだった。舞姫の時の鷗外は作家としてははじまりであった。高瀬舟の時は円熟期になるうとしていた。また時代的にも文章が大きく変わろうとしていたのだ。舞姫の時と高瀬舟の時ではかなり文章が違ってきているのである。従ってテーマもさることながら全く違う作品になっているのである。

「わかりにくいところがあるよね」

「そうよね」

若菜もそれに同意する。学生では舞姫は結構読みにくいものがある。

「それに悲しい話だし」

「そうなんだよね」

尚志もその悲しいというのには同意だった。舞姫は鷗外の若かりし日のベルリン留学での恋愛がもとになっていると言われている。

「あの人日本にまで来たそうだよ」

「そうなの。鷗外に会いに？」

「うん」

尚志もそのことを若菜に言う。これは実際にあったことである。

「結局駄目だったみたいだったけれど」

「そうだったの」

「うん。帰るしかなくてね」

「実際に悲しい話だったのね」

当時明治政府は有能な人材を欧州に留学させていた。その人材で国を発展させる為にだ。鷗外もその一人だったのだ。彼は医者として将来を期待されていたのだ。実際に彼は陸軍軍医總監にまでなる。当時は小説家としてだけでなく医者としても有名だったのだ。むしろ医者としての方が名が知られていたのかもしれない。

「そうだね。鷗外にも立場があつたし」

「そのせいで別れるしかなかった」

「あの頃はよくあつたそうだから」

「これも実際にあつたことである。」

「だから。結局」

「そういうの考えると舞姫って全然違つて見えるわね」

「こつした小説って昔は多いわよね」

「そうだよね。太宰だつて」

太宰にも話をやる。

「自分の話をもとにしているのが多いし」

「そうね。ところでね」

「何かな」

話はこちらで文学から少し離れた。

「松本君だつたわよね」

「うん」

尚志は若菜の言葉に応えて頷く。

「小説とか詳しいのね」

「別にそうじゃないけれど」

謙遜しているがそれはわかる。彼は結構本を読んできているのは

確かなのだ。

「よかつたらね」

若菜はそんな彼にまた言う。

「また教えてくれない？」

「小説のこと？」

「ええ。私好きだから」

あらためて頼む。

「よかつたらね」

「うん、いいよ」

その言葉ににこりと笑って頷く。

「それじゃあね」

「有り難う」

こうして彼は若菜と図書室でよく話をするようになった。これはやがて教室でもということになり話はすぐに皆の知るところとなった。皆尚志と若菜が仲良くしていることに驚きを隠せないでいた。

第四章

「おい」

真もその中の一人だった。彼は尚志が一人になっている時に声をかけてきた。

「どついう風の吹き回しだい？」

「どついうつて」

「御前矢吹さんと付き合っていたのかよ」

「いや、別にそれは」

それは否定する。

「けれどさ、矢吹さんっていい人だぞ」

「ほら見る」

真は今の尚志の言葉の言質を取る。そのうえでまた言つのだった。

「いい人だつて。普通は言わないだろ」

「いや、それはね」

話がまずい方向にいっているのを感じながらそれを否定する。

「変な意味じゃなくてさ」

「じゃあどついう意味なんだ？」

「そんなに意味はないよ」

尚志は困った顔で述べる。

「別に。何も」

「何も無いのか」

「当たり前だよ」⁶

尚志は真に対して語る。語るその顔は困ったものではあったが言葉ははつきりしていた。その顔は真がよく知っている真面目な尚志の顔であった。

「何でそうなるんだよ」

「わかったよ」

真は苦笑いを浮かべてそう返した。

「何もなしならな。困ったことにはならないな」
「!?!」

尚志は今の真の言葉にふと気付いた。

「困ったことって?」

「あれ、知らないのか」

真は今の尚志の言葉に返してきた。

「矢吹さんの親父さんいるだろ」

「あの滅茶苦茶強い人?」

「そう、その人」

尚志に対して語る。語りながら言葉を続ける。

「その人が問題なんだよ。実はさ」

「どういうふうの問題なの?」

「あの人凄い過保護らしいんだよ」

今度は真が真面目な顔になった。その真面目な顔で尚志に述べる。話もどうにも真面目なものになっていた。尚志も真面目な顔で聞いていた。

「過保護なんだ」

「ここに転校した理由だってそうだったじゃないか」

次にそのことについて言及してきた。尚志もそれを聞いてあのことを思い出した。

「そうだったね」

「思い出したな、あれだよ」

「そうだったね。転校したのは」

若菜の転校の理由は彼女にストーカーしている変質者を彼女の父が成敗したからである。そのことを今話しているのである。

「だろ?それだな」

「うん」

「その人が言っているらしいんだよ」

真は言う。

「娘に近付く奴は成敗するって」

「剣呑だね」

「それだけじゃなくてな。告白するだろ？」

「どうなるの？」

「言っているんだよ、勝負するって」

どちらにしろその父親が出て来るということであった。

「それで勝つたらってな。言ってるらしいんだ」

「それって無茶苦茶じゃない」

尚志は話をそこまで聞いて述べた。

「そんな柔道や空手をやってる人に勝てるの？」

「マス大山ならどうか」

「死んでるし」

大山倍達のことである。極真空手の創設者でありカラテ馬鹿一代の主人公でもある。一代の武道家としてその名を残している。

「じゃあ一番凄かった時代のアントニオ猪木か」

「よく知ってるね」

「まあな。けれど普通の人間には無理だな」

真はそれを言う。

「そこまで無茶苦茶な人に勝つのは」

「そうだね。けれどさ」

尚志はふと述べてきた。

「どうした？」

「いや、話を聞いてると」

「ああ」

「何かお姫様を守るあれみたいだね」

「ドラゴンか？」

「うん、そんな感じじゃないかな」

彼は首を傾げながら述べる。真もその言葉に頷いてきた。あながちそうでもないといった感じであった。

「そうかもな」

「だよ。物凄い話だよ、本当に」

「だからな。話をする位ならいいが」

「交際は止めておけてことだよな」

「そういうことさ。まあ」

「ここで彼を見てくすりと笑ってきた。

「何？」

「御前にはその心配はないかな」

「心配ないってどういうこと？」

「別に興味とかないだろう？」

「真はそう彼に問うてきた。何か彼の心を見透かしたような言葉であつた。

「女の子には」

「そうだなあ」

尚志も首を傾げながらそれに応える。

「そうかも。矢吹さんとまさ、普通にお話してるって感じだし」

「多分それ位なら問題はないさ」

「真は言う。」

「けれどな。それ以上は……わかるな」

「わかつたよ。深入りするなつてことだよな」

「ああ、わかつたな」

「真はそう話してまずは安心した。これで彼もわかつたと思つたらだ。しかし話は微妙にでも動いていくものだ。それは尚志と若菜についても言えることであつた。」

第五章

この日も二人は学校の図書室で話をしていた。小説を見ながらあれこれと話をしている。

「あれ、三島由紀夫も読むんだ」

尚志は隣の席にいる若菜の机に三島由紀夫の本があるのを見て声をあげた。作品は金閣寺であった。言わずと知れた彼の代表作であり美しい文章で金閣寺を燃やした若者の葛藤と破滅に至るまでを書いている。

「ええ。これね」

「何かあったの？」

「お父さんに勧められたのよ。読んでみるといいって」

「お父さんって？」

「私のお父さんよ」

若菜はにこりと笑ってそう返す。

「お父さんが三島由紀夫の本好きだから」

「そうなんだ」

「ええ。結構好きよ」

そう言って金閣寺を彼に見せる。彼はそれを見てふと目を動かしてきた。

「文章もいいしね」

「そうだよね、三島はね」

尚志もそれに頷く。

「文章が凄くいいんだよ。とても綺麗で」

「お父さんは惜しい人材だったって嘆いているわ」

「そう」

三島は自殺している。市ヶ谷の自衛隊基地でクーデターを促す演説をしてそれが受け入れられず割腹自殺をしているのである。彼が死んだ日は憂国忌とされている。いささかアナクロになってしまっ

ていたとはいえこの忌日の名前は彼に相応しいものと言える。

「もつといい作品が書けただろうにっつて」

「そうかもね」

ただしそうではないかも知れないという場合もある。作家がいい作品を書けるかどうかというのは作家自身にもわからないものだからだ。

「最近他の作品も読んでるのよ」

「潮騒とか？」

「それも読んでるし豊穰の海とかも」

「どれも三島の代表作である。」

「色々読んでみるわ」

「矢吹さんのお父さんも本好きなんだ」

「それはちよつと違うの」

「違うんだ」

その言葉には何が何か少しわからなかった。

「どういうことなの？」

「あのね」

若菜はそれを受けて話をはじめた。

「本は学ぶもので。好きになるものじゃないって考えているのよ」

「またそれは随分と厳しいね」

「そうでしょう？ 凄い古風な人なのよ」

「そうみたいだね」

彼女の言葉に頷く。それからまた述べた。

「そうなのよ。家でも亭主関白で」

「うっん」

今時そんな人がいるのかとかえって興味を持った。そのことだけでもかなり驚きである。少なくとも尚志の両親に関して言えばそんなことはない。

「お母さんは尽くす妻って感じで」

「うちと全然違うね」

実際にそのことを言葉に出してきた。

「うちお母さんが凄く偉いよ。お父さん弱くて」

「普通はそうよね」

若菜もその言葉に応える。どうやら自分の家が今ではかなり珍しい家になってしまっていることを自覚しているようである。思えばそれは当然のことである。

「やっぱり」

「やっぱりっていつか何かね」

尚志はそれに応えて述べる。

「人それぞれだし家だしね」

「別に変に思うことはないかしら」

「そう思うよ」

いつもの穏やかな様子で述べた。その言い方も内容も尚志らしいものになっていた。

「僕はね」

「有り難う」

若菜は尚志のその言葉を聞いて少し頬を緩ませてきた。

「そう言って貰えるよね。嬉しいわ」

「そうなんだ」

「ええ。何でもかんでもお父さんが第一だからね。結構大変で」

これもまたかなり驚くべきものであった。本当に尚志の常識とは全く違っていて別世界にいるような気分になってきていた。

「困ってるの？」

「困ってるって言うてもどうしようもないし」

余計に辛い言葉であった。

「それでも家族には暴力とかは振るわないのよ」

当然と言えば当然であった。家族に暴力を振るうのは人間としてどうかだ。叱るのはいいが暴力を振るうのは頷くことができない。

「それはね」

「それはいいね」

「ええ。特に私末っ子だから
はじめて知ることがここで出て来た。」

「余計に」

「いいお父さんなの？」

「そうね。無茶なことは言わないし」

とりあえずは人間としてはまともであることもわかった。それを聞いてほっとした。

「いい人なんじゃないの？」

「けれどね」

しかし若菜はここで困った顔を見せてきた。

「決まりとかは凄く厳しいの」

「決まり？」

「家訓なのよ」

またしても今時珍しい言葉が出て来た。尚志はその単語を聞いて目を丸くさせたのであった。

「家訓って」

「あれっ、ないの？」

若菜はこの言葉を聞いて自分も目を丸くさせた。二人共目を丸くさせたがそれぞれ違う理由によるものであった。けれど表情は同じ感じになっていた。

「ないよ」

尚志は苦笑いと共に述べた。

「そういつのはね」

「そうなんだ。ないの」

「うっん、多分今ある家ってかなり少ないよ」

尚志は考えながら若菜に述べる。

「ある家って実際にはじめて聞いたし」

「それって少し驚いたわ」

若菜は目を丸くさせたままだった。本当に意外といった感じだった。

尚志も同じだった。彼も驚いていたのだった。

「とにかくそれがあるから。私かなり」

「凄いね、何か本当にあるなんて思えないよ」

「私も驚いているわ。他の人の家ってないのね」

「とりあえず僕の家はね」

「ないのね。それでね」

若菜はさらに言葉を続ける。じっと尚志を見ている。見ているその姿が尚志の目に映っている。尚志もまた若菜の目に自分の姿を見ていた。

第六章

「一番厳しいのはね。これお父さんが決めたのだけれど」
「うん」

「私と付き合う人はお父さんに勝負して勝った人しか駄目なのよ。
これ何時の間にか決まったことだったんだけれどね」

この話は本当だった。噂ではなかった。尚志はそのことをあらためて知ったのであった。

「本当だったんだ」

「そう、本当だったの。噂になっていたのは知っていたわ」

「まさかね」

若菜の言葉に驚きを隠せない。呆然としている。彼女はそんな尚志に対してさらに言葉を続けるのだった。

「あまり言わなかったけれどね。しかも」

「しかも」

「一度付き合ったからには。何があっても別れたら駄目だっていうし」

「それって彼氏にも言うの？」

「そうみたい。私は付き合ったことはないけれど」

「うわ……」

言葉も出ない。かなりとんでもない話だった。まるで明治時代にタイムスリップしたような感じを受けてしまった。それが顔にそのまま出ていた。

「大変だね、矢吹さんも」

「お父さんに勝てる人ってそうはいないだろうし」

苦笑いと共にまた述べる。

「このままだと」

「まあさ。そのうちね」

尚志はそんな彼女を慰めるようにして言葉をかける。

「何とかなるかも」

「だといけれど」

不安を隠せない顔になっていた。本当にこれからのことに困っているようだった。

「お父さんをどうすればいいのかしら」

「それが問題なんだね」

「そういうわけで彼氏募集中なの」

あらためて述べる。

「お父さんに勝てる人をね。何か格闘家でも無理かも知れないけれど」

「まあまあ」

答えも希望も出そうにない言葉だった。その言葉のやり取りの中で尚志も若菜もどうしたらいいかわからなくなってきた。二人はそうして少しずつ話をしていった。しかしその中で付き合いは少しずつ深くなっていく。それは周囲も二人も予想しない程だった。

「なあ」

真が教室で尚志に声をかけてきた。尚志は彼に顔を向けて応える。

「何？」

「ちよつと場所変えようぜ。ここじゃあれだ」

「何かあるの？」

「あるから変えようって言うんじゃないか」

真は苦笑いを浮かべてこう返した。

「だからだよ。いいか？」

「それじゃあ」

「校舎裏でもな」

そう言つて尚志を校舎裏に案内した。そこは人気もなく寂しいところだった。真は彼をそこに案内するとあらためて話をはじめたのであった。

「別に喧嘩とかそんなんじゃないよ」

まずはこつこつ前置きしてきた。

「ただな。ちよつと気になつてな」

「何が？」

「矢吹さんのことだよ」

真は彼に顔を向けたうえで若菜のことについて述べてきた。

「御前最近あの人と結構一緒にいること多いよな」

「ああ、図書室でだよ」

何のことが尚志もわかった。それで頷くことができた。

「そうだよ。それ噂になつてるぞ」

「噂？」

「そうだよ。御前と彼女ができてるんじゃないかなつてな。どうなんだ、そこは」

「別に何も」

尚志は戸惑いを覚えながら彼に答えてきた。

「ないけれど」

「そうなのか？」

「うん」

尚志はまた答えた。彼にとっては寝耳に水の言葉だった。顔も今はじめてとんでもないことを聞いた、そう語っていた。

「本当に何も無いよ」

「わかった」

真はそれを聞いてまずは安心したように頷いた。

「ならいい。問題はないな」

「うん。ただね」

「ただ？」

「一緒にいたいって思うね」

尚志の言葉は何気ないものだったがそれでも真にとってはそれで充分気付くことであった。彼はその話を聞いて眉を顰めさせてきた。

「おい、まさかそれって」

「それって？」

「わからないのか。御前やっぱり彼女のことを」

「一緒にいたいっていうのが駄目なの？」

尚志はまだわからない。しかし真はわかっていた。この差はあまりにも大きい。がそれすらも尚志にはわからないものであった。

「だって僕達友達だし」

「友達か」

「うん」

何もわからないままこくりと頷く。頷く顔を見てもやはり何もわかってはいない。

「それだけだよ。別にね」

「だったらいい」

彼はそう言い捨てた。

「それでな。ただしな」

そのうえで付け加えてきた。

「友達以上にはなるなよ」

「別にならないよ」

彼の言葉は相変わらずであった。何もわかってないまま答えている。その顔も変わりはない。

「そんなことは」

「じゃあそうしろ」

真は何もわかっていない。彼とは違って真剣な顔で述べてきた。

「いいな、何があっても」

「わかったよ」

何もわからないまままた答える。

「それじゃあ」

「絶対にな」

彼の言葉は尚志に絶対を強いるものだったが尚志はそれもわかってはいなかった。そう、彼は何もわかってはいなかった。何もわからないまま若菜との付き合いを続けていた。これが彼を後戻りさせなくなっていた。

第七章

ある日彼はまた若菜と一緒にいた。図書室からの帰り道二人並んで夕焼けの道を歩いていった。その時はまだ気付いてはいなかった。

「今日ね」

若菜はその夕焼けの道の中で尚志に顔を向けてきた。

「読んだ本だけねど」

「ああ、あれね」

尚志はその言葉に頷いて述べてきた。

「武者小路実篤の」

「棘まで美し、あれよかったわよね」

「うん」

彼はその言葉に応えてきた。

「何か最後はね。読んで綺麗な気持ちになれるよね」

「そうね」

若菜もその言葉にまた頷いてきた。

「綺麗に収まっていて」

「武者小路実篤の恋愛ものってね。綺麗だから好きなんだよ」

「私も」

「そうなの？」

「ええ。理由は松本君と同じ」

そう述べてきた。にこりと笑ってきていた。

「綺麗だし。心の描写とか」

「同じなんだ」

その言葉を聞いて何か嬉しそうだった。その嬉しさが自然に噛み締められる。彼の心の中で噛み締めたものが微妙に変化しはじめていた。

「僕と」

「そうね。同じよ」

若菜は尚志のその言葉に頷く。

「同じなんだ」

またその言葉を言う。自分の言葉の響きが微妙に心の中でシンク口する。シンク口していたのは自分の心の中だけだった。しかしそれはもう止まらなかった。

「また読みたいよね」

「うん」

その言葉にこくりと頷く。それからすぐに呟いてきた。

「二人で」

「そうね、二人で」

若菜も言った。

「読んでいこうね」

「わかったよ。じゃあまた明日から」

「ええ。宜しくね」

これからはじまりだった。小説を通じての若菜との交流が心と心の触れ合いになった。尚志はその触れ合いを止めることはできなかった。そのまま深く、深く入っていく。そのうちに彼は彼女のことばかり思うようになったのだ。

若菜と話していても次第に小説より彼女の方に向かうようになっていた。それはやり取りにも出てきていた。

「ねえ矢吹さんさ」

「何？」

「たまには。他の場所で本読んでみない？」

「他の場所って？」

「そう。例えばね」

それに応えて述べる。思い付きが言葉のはじまりだったがそれでも動きはじめた。

「公園とかじゃ。駄目かな」

「急にどうしたのよ」

尚志のその言葉にくすりと笑ってきた。

「公園で読書って」

「駄目かな」

若菜の目を見て問う。

「それじゃあ」

「いえ、いいけど」

しかし若菜の返事は意外なものだった。少なくとも尚志にとっては思いがけない言葉だった。

「いいの？」

「ええ、いいわよ」

にこりと笑って答える。

「だって。たまには気分転換になるわよね」

「そうだよ。だから」

若菜の言葉に乗って少し慌てたような言葉で言う。

「いいよね。それじゃあ本は」

「武者小路実篤よね」

「うん、他には」

何か嬉しい気持ちになって他の本も探す。自分でもはしゃいでいるとわかる程気持ちのがのっていたのだった。

「鷗外もね」

「そうね。雁とか」

切ない失恋の話だ。これも鷗外自身の話であるという。

「一緒に持って行きましょう」

「うん」

選んだのは恋愛小説ばかりだった。それはある程度意識していた。それを自分でもわかっていていたから余計に気持ちに乗っていたのだった。

その気持ちは続いた。彼はさらに若菜が好きになってきた。その気持ちを抑えることができなくなり彼女との心の通い合いを続けていった。

そうしているうちにまた彼女を好きになる。彼女もそうだった。

段々と尚志の側にいるのが楽しくなってきたのである。二人の仲は進んでいく。

二人でいないと心が落ち着かなくなり二人だと落ち着く。図書室だけでなく教室や他の場所でも。二人の関係はもうクラスメイトはおるか学校中の話題となっていた。真はそれを見てまた彼と校舎裏で話をした。

「前言ったけれどな」

「矢吹さんのことだよな」

「そうだよ。いいんだな」

「いいよ」

尚志は思い詰めた顔で彼に答えた。

「僕は矢吹さんが好きだ。もうそれを隠せなくなったんだ」

「そんなにか。何があってもいいんだな」

「うん」

思い詰めた顔から強い顔になった。決意の顔だった。その顔で答える。

「矢吹さんのお父さんのことですよ？言いたいのには」

「ああ。前に言ったよな」

真はそのことをあらためて言ってきた。彼女の父親のことはもう誰でも知っている。知っているからこそ誰も若菜と付き合おうとしないのだ。

「それでもか」

「それは最初からわかってるよ」

尚志は言葉を返してきた。

「だけれど」

「勝てるのか？」

「無理だね」

はつきりと答えることができた。彼は青白い若者に過ぎない。それに対して彼女の父親は武道の達人だ。とても適う相手ではない。そもそも尚志は喧嘩ができないのだ。だから本が好きだという側面

もあるのだ。

「普通にやっつて勝てる相手じゃないよ」

「そうだ。彼女と付き合うのは無理だぞ」

「いや、それでも」

尚志は言う。

「僕は矢吹さんが好きなんだ。だから」

「怪我で済まないかも知れないのにか」

「わかった」

そこまで聞いたうえで頷いた。真はもう彼を止めるつもりはなかった。

「それならな。好きなようにしろ」

「そうさせてもらうよ。色々と考えたけれど」

「決意は固いか」

「怪我をしてもどうなってもいい」

ここまで言うてきた。40

「それでも僕は」

彼は迷いはなかった。迷いはなく一途に向かうだけだった。そのことを若菜にも言う。若菜はそれを聞いても驚きはしなかった。けれど言うのだった。

第八章

「お父さんのことだけれど」

「わかっているよ」

彼は答える。

「わかっているからだよ。何があってもね」

「そう」

尚志のその言葉を聞いて俯く。

「いいのね、それで」

「矢吹さんと一緒にいたいから」

彼はじつと若菜を見ていた。見詰めたまま話をするのだった。その目の中にいるのは若菜しかない。それこそが何よりの証拠であった。

「いいよね、矢吹さん」

「困ったわね」

その言葉に諦めたような、それでいて達観したような笑みを溜息と共に出してきた。

「じゃあ明日ね」

そのうえで彼に顔を向けて言う。

「明日、私の家に来て」

「うん」

若菜の言葉に頷く。遂にその時だったのだ。

「行くんだよな」

「もう決めたよ」

次の日の昼、尚志は屋上で真と二人でいた。そこで若菜のことに
ついて話をしていた。

「何があってもね」

「いいんだな？」

真はあらためて彼に問うてきた。

「何があっても」

「何があっても行くよ」

そう問われても尚志の決意は変わらない。真はそんな彼の横顔を見て何か今まで見たことのないものを見たとわかった。

「そこで何を受けてもね」

「前に聞いた時と同じだな」

真はそれを聞いてふと言った。

「御前、案外強いんだな」

「強いかな」

「ああ、強い」

彼はそう尚志本人に告げる。

「御前は喧嘩はできなくても強い。わかるか」

「ええと」

その言葉に少し戸惑っていたがやがて首を傾げながら答えるのだ
った。

「心が強いってことかな。よくわからないけれど」

「そうさ。御前は本当に強い」

また彼に言う。

「それが今わかったよ。御前の強さがな」

「自分ではそうは思わないけれど」

自分でもはわからない。どうにも首を傾げさせたままだった。

「そうなんだ」

「そうさ。後はその強さをぶつける」

この上なく真剣な顔で尚志の横顔を見て述べる。

「いいな、矢吹の親父さんが化け物でもだ」

「行けっというんだね」

「その強さ見せてみる」

こうまで言い切る。

「俺が言うのはそれだけだ」

「よし」

尚志は顔をあげた。彼もまた向かう。前へと。
放課後。彼は若菜と一緒に彼女の家に向かう。そこはかなり大きな和風の屋敷であった。

「ここなんだ」

「ええ」

若菜は尚志の言葉に頷く。

「道場やってるのよ」

「そうなんだ」

二人は居間屋敷の前の正門にいた。そこから屋敷を見上げていた。

「ここが」

「入るわよね」

そつと尚志に問うてきた。

「やっぱり」

「決めたから」

ここでも決意が変わらない。それは変わりはないのだった。

「君もいいんだよね」

「私なんかでいいのよね」

顔を俯けさせてきた。

「それで。その」

「君以外の誰もいらない」

その言葉も変わりはない。尚志は屋敷をじっと見詰めていた。

「さあ。だから」

「わかったわ」

尚志のそこまでの決意をあらためて見て。若菜も決めた。

「じゃあ。行きましょう」

「うん」

その立派な門をくぐった。そして玄関から家に入る。そうして若菜に案内されて家の奥へと進んでいくのだった。

第九章

廊下は長く家の中はかなり広がった。障子から見える部屋は和風でどれもがかなり広がった。しかもその数もかなり多かった。まさに屋敷だった。

「広いね」

尚志はその家の中を横目で見ながら述べた。

「本当にお屋敷なんだ」

「よく言われるの」

若菜もそう答えた。自覚はあるのだった。

「昔からあるおうちだね。代々道場で先生をしていて」

「古い家なんだね」

「うん。そのお父さんだけれど」

ここで若菜は自分の父について話をはじめた。二人は廊下を並んで進んでいる。

「松本君のことは話したけれど」

「どうだったの？」

「何かね」

今一つ浮かぬ顔だった。その顔のまま述べる。

「表情が見えなかったの」

「表情が！？」

「ええ」

尚志の言葉にこくりと頷いてきた。

「何かよくわからないけれど。考えていることもわからなかったわ」

「ううん」

「怒っているのか、そんなのもわからなかったの」

「そう述べる。若菜もわかっている感じがなかった。」

「けれどね。覚悟はしていてね」

「うん」

その言葉にこくりと頷いた。

「わかつてるよ。わかつているからここに来たんだ」

「いいわね」

ここで家の一番奥にまでやって来た。襖が扉になっていた。

「ここだけだ」

若菜は立ち止まった。その横で彼に声をかける。

「行きましょう」

「わかったよ」

また頷いた。若菜が襖を開けてそこに入ることになった。

「お父さん」

若菜が部屋の中に声を入れてきた。

「連れて来たわ」

「うむ」

その部屋の奥から重厚で低い男の声がした。見れば和服を着た厳しい顔の初老に差しかかろうという男が座布団の上に正座していた。

「この前話した松本尚志君だけだ」

「入れ」

また重厚な声がした。若菜はそれに頷いて尚志に顔を向けて言うのだった。

「じゃあ入りましょう」

「わかったよ」

尚志は青くなっていたがしつかりとした顔で頷いた。既に覚悟は決めていたから迷うことはなかった。

「行くう」

「ええ」

本当に部屋の中に入った。そうして若菜に案内されて部屋の中を進む。そこは応接の間でかなりの広さがあった。その男の前に座布団が二枚並べられていた。

「座って」

若菜はその座布団の前に案内してから尚志にまた声をかけてきた。

「うん」

尚志はそれに頷く。そうして二人並んでその座布団の上に座ったのであった。

「はじめまして」

尚志は正座したままその男に挨拶をした。

「松本尚志です。矢吹さんのクラスメイトの」

「君がか」

男は正座したまま着物の中で腕を組んでいる。その状態でまたあの重厚で低い声を出してきたのであった。

「はい」

「名前は聞いている」

彼は儼かな声で尚志に告げてきた。

「若菜からな。言いたいことはわかるな」

無言でこくりと頷く。そのうえで彼を見る。

「まず私の名を言おう」

彼はそう尚志に告げてきた。

「矢吹敏樹だ」

彼は名乗った。

「それが私の名だ。そして私が名乗る時は」

じつと尚志を見据える。目からは強い光が放たれ鋭く光っていた。

「多くは勝負の時だ。それも聞いているな」

「勿論です」

身動き一つせずに答える。怖いがそれを必死に押し隠しての言葉だった。

「わかってます。けれど」

「また聞こう」

矢吹はまた尚志に声をかけてきた。

「君は。若菜が好きか」

「最初は何とも思っていないませんでした」

「まずはこう言ってきた。」

「最初は、か」

「只のクラスメイトだと思っていました」
正直に述べる。隠す気もなかった。

「けれど次第に」

「ふむ」

矢吹は彼の言葉を聞いたうえで娘に顔を向けた。そのうえで問うた。

「若菜」

「はい、お父さん」

「御前の言った通りだな」

そう娘に声をかけてきた。

「間違いないな」

「ええ」

彼女は別に怖がってはいなかった。父娘ということで別に怖がることはないであろう。

「そうよ」

「ふむ、確かにな」

娘の言葉に対して頷くとまた尚志に顔を向けてきた。

「嘘についてはいいない。それはわかった」

「有り難うございます」

「それでだ」

そう言っただうえでまた口を開く。まるで閻魔の尋問のように思えた。

「次第に好きになったのか」

「そうです」

その問いに対しても答える。

「一緒にいるうちに」

「それも聞いた通りだ」

話をしているうちに嘘をついたらどういうことになっていたか、そう思うと冷や汗が出るのを止められない。実際に今彼は恐怖を必

愛は勝つ

死に隠していたがそれは顔だけのことであり身体中から脂汗を滝の様に流していた。

第十章

「嘘ではない」

「はい」

「そしてだ」

彼はさらに問うてきた。問い掛けは簡単には終わらない。

「君は私のことを聞いているな」

「はい」

その言葉に答えるのが一番怖かった。彼は後でよくこう言った。

「私が娘と交際する者に何を求めるのか」

「勿論です」

必死に気を保ちながら答えた。

「武道をしておられるのですね」

「そうだ」

矢吹は全てを威圧する声で答えるのだった。

「そして」

「矢吹さんと付き合う場合は、ですね」

「わかっているのか。それではいいな」

「そのつもりです。それでは」

「うむ。では」

すくつと立ち上がった。傲然とした感じで彼を見下ろしている。

その威圧感に気圧されそうになるが彼はそれでも何とか矢吹を見上げてそこに立っていたのであった。

「来るがいい」

「道場にですね」

「そうだ、来るがいい」

彼はその場を去った。重厚な足取りで歩いていく。尚志はそれを見送った後で若菜に顔を向けて言ってきた。

「じゃあ」

「ええ。それでいいのね」

「何度でも言うよ。そう決めたから」

彼の言葉も変わらない。そこにある強い決意もだ。

「着替えないといけないね」

「服は用意してあるから」

「それで何なの？空手？柔道？」

「どれを着ていってもいいわよ」

若菜は答える。答えながらもじっと尚志を見ている。

「お父さんは多分合気道の服を着てるから」

「合気道なの」

「こつした時はいつもなの」

そう彼に教える。そこにあるのは何なのかと思った。

「どういうわけかわからないけれど」

「わかったよ。じゃあ僕も」

何かがあると思った。彼はそれを聞いて着る服を見つけたのであった。

「それを着るよ」

「うん。それじゃあ」

若菜はその言葉を聞いてから立ち上がった。そうして尚志に顔を向けて言うのであった。

「来て」

「服がある部屋だね」

「そうよ」

「こくりと頷いて答える。」

「そこに案内するから」

こつして彼は服がある部屋に案内されそこに入った。そこは畳と襖の何もない部屋であった。どうやら着替え用の部屋だった。入ると部屋の脇に多くの服があった。着替え用の部屋であるらしい。

その中の一つを手を取った。それが合気道の服だった。

自分が着ている服を脱いでまずはシャツとトランクスだけになる。

そこから着ようと思ったがふと思い出したことがあった。

「あつ、そうか」

武道の服は下着を着けない。それを思い出して下着も脱いだ。そうして服を着た。和風の服の着方はあまりよくはわからなかったがそれでも着たのであった。

服を着るとそこで若菜の声が部屋の外から聞こえてきた。

「もう着た？」

「うん」

そう彼に問うてきた。

「今着たばかりだよ」

「そう、じゃあ行きましよう」

部屋を出て若菜の前に来た。そうしてまた彼女に案内されて今度は道場に向かう。そこにはもう矢吹が待っている筈なのだ。

「来たな」

「はい」

矢吹は若菜の言葉通り合気道の服であった。白い上着に紺色の袴が実によく似合っている。

「じゃあ早速」

「わかっているようだな」

「!？」

矢吹が構えもせず服の中で腕を組んでいるのを見て尚志は妙に思っていたがここでさらにこう言われたので余計に妙に感じた。

「どういふことですか？それって」

「心だ」

「心……」

「左様、心だ」

また尚志に対して言う。

「武道は心、私は何故合気道の服を着ているかわかるか」

「そこに武道の心があるのですね」

「そうだ、それだ」

變は勝つ

そこなのだと言う。これは武道の心得のない尚志にははっきりとはわからない。しかしある程度は知っているのです。それを少し言ってみた。

第十一章

「確か合気道は自分からは仕掛けませんね」

「知っているのだな」

「一応は。つまりここで合気道の服を着るといふことは自ら攻撃を仕掛けたりはしない」

「あくまで自らを守るもの」

「その通りだ」

尚志のその言葉に満足したように頷く。頷いた後でまた言葉を続ける。

「だから娘に近付く男にはまずこの服を着ることにしている。そうして試していたのだ」

「心をですか」

「それをわかっている者がいなかった。ずっとな」

「ずっとですか」

「あげくの果てには言い寄る男までいる。全く以ってな」

嘆きの言葉に半ばなっていた。それは武道家として、父親として、二つの顔を持つ言葉だった。そうしてやり取りを続けるのであった。

「しかし今やっとだ」

「やっとですか」

「君が合気道の服を着てきたのはそれだな。武道とは強さを求める。これは確かにそうだ。しかしそれは身体を強くさせるだけではないのだ。矢吹は今それを尚志と彼の横にいる若菜に対して語っていた。

「同じく心の強さを求める。この合気道こそがまさにそれだ」

「合気道にある武道の心ですか」

「心の強さ、それがあからこそ武道なのだ。それが無い者には娘を任せるわけにはいかないのだ」

「そうだったの、お父さん」

「そうだ」

娘に顔を向けて答える。

「御前は私の大切な娘の一人だからな。それが無い者にどうして任せられるんだ」

「それで今まで」

「君の合気道、そして武道を確かに見た」

また尚志に顔を向けて述べる。

「君はまだ身体は弱い。それでも心は備わっている」

「はあ」

おぼろげに何かを感じながら着たのだがそれが僥倖だったようだ
と思いながら話を聞く。話を聞いているだけの尚志に矢吹はさらに
言葉を続けるのであった。

「娘を任せよう」

遂にその言葉を出してきた。

「いいな」

「いいんですか」

「私も男だ」

殺し文句が出た。

「言葉を偽ることはない」

「有り難うございます」

「よかったね、矢吹君」

若菜は彼の側にやって来て声をかける。今にも抱きつかんばかり
であったが目の前に父がいるのでそれは止めていた。流石にそれは
まずかった。

「私達これで」

「そうだ。ただしだ」

「ただし？」

「条件がある」

彼は尚志に対して言ってきた。

「その条件は」

變は勝つ

「何なんですか？」

話はこちらで終わりではなかった。尚志は矢吹の口からとんでもないことを聞くのであった。

第十二章

「それでどうなったんだ？」

暫く経ってから真が教室で尚志に声をかけてきた。

「傷とかないところ見ると無事だったんだな」

「うん」

尚志は彼に答える。にこりと笑っていた。

「実はさ。矢吹さんのお父さんと話をしたね」

「話したのか」

「そうだよ。それでね」

にこりとした笑みが続く。その顔から何があったのかわかる。

「矢吹さんと付き合っていていいってさ」

「奇跡だな」

その言葉を聞いた真の最初の言葉だった。

「まさかとは思ったが。本当にそうなるなんてな」

「僕もまだ驚いてるんだよ」

尚志もそう述べる。実際はその顔には少し驚きが見られる。

「勝負することもなかったし。武道の心がわかってるって言われて」

「それで矢吹さんと付き合うことになったのか」

「うん。ただ」

「ただ。どうした？」

「困ったことが一つできたんだ」

真にそう述べる。その困ったことが何なのか真はいぶかしんで首をかしげさせる。尚志はそんな彼に対してまた述べてきた。

「何だ、それは」

「ほら、矢吹さんのお父さんって格闘家じゃない」

それを言ってきた。困った顔をして。

「だからさ。武道の稽古もすることになって」

「武道のか」

「矢吹さんと付き合う為の絶対条件だつて言うんだよ」

これは人によつてはかなり厳しい条件であることは言うまでもない。ましてや青白い文学青年でしかない彼にとつては洒落にならない程過酷なことだ。だから困っているのである。

「心だけでなく身体も強くなることがね」

「身体もか」

尚志の心を認めたくえでのごとで今度は彼の身体を強くさせようというのだ。どうやら心身共にというものらしい。それがはっきりとわかる。

「そうなんだ。おかげでね」

困つた顔から困り果てた顔になる。その表情が一つや二つの言葉よりも雄弁に今の彼の心境を物語っていたのであった。

「最近かなり辛くて」

「いいことじゃないか」

しかし真はそう彼に言う。

「頭ばかりじゃ駄目だからな、やっぱり」

「君もそんなこと言うんだ」

困り果てた顔がさらに困つたものになる。この上なく困っている顔と言つべきだろうか。

「物凄く辛いのに」

「辛いからいいんだよ」

真はそう彼に述べる。

「まあ御前なら大丈夫だ」

そしてまた彼に告げてきた。

「絶対にな」

「何でそう言えるの？」

尚志はそのこの上なく困っている顔で真に問う。彼には今一つ自信がないようであった。どうやらかなり辛いようである。それもやはり顔からわかる。

「物凄く厳しいのに」

「矢吹さんが好きなんだろう？」

真は尚志に問うてきた。

「何があっても」

「うん」

その言葉にこくりと頷く。

「そうだよ、ずっと一緒になりたい」

それをはつきりと述べてきた。

「何があっても」

「今自分で言ったな」

真は今の彼の言葉を指摘してきた。

「何があってもって」

「あっ」

言われてそのことに気付いた。彼は確かに今何があっても、と言った。このことこそが彼の決意であったのだ。それを自分でも言ったのであった。

「そういうことだな」

「そうだね」

自分の言葉に対して頷いた。

「わかったよ。それじゃあ武道もやるよ」

「それに案外いいかもな」

「身体も強くなるから？」

「そうさ。他人のことだからって言われるかも知れないけれどな」

真はそう前置きしたうえでまた言ってきた。

「文武両道って言うじゃないか」

「文武両道かあ」

「そうさ、だからだよ。いいと思うぜ」

彼はまた述べた。

「御前は頭と心はあるしな。後は身体だよ」

「身体かあ」

「三島由紀夫だったか」

彼もこの名前を出してきた。若菜の父が好きなその作家だ。何故か若菜が関係する話は三島がよく出て来るものだと思っていたりもする。

「あの人だつて最初は青白い青年だつたよな」

「途中から剣道とかボディビルやってね」

そうして己を鍛え上げて身体も強くしていったのだ。最初は痩せた顔立ちであつたのが逞しく男らしい顔になつたのである。人は変わるということの一例でもある。彼は現代の武士を目指していたとも言われている。

「そつなつたんだよね」

「御前もそつなつてみるか？」

真は言ってきた。

「彼女の為にも」

「そつだね」

あらためて頷いてきた。

「それなら」

「よし、じゃあこれで決まりだな」

真は気持ちがいいままではつきりとした言葉を尚志にかけてきた。

「頑張れよ、応援しているからな」

「有り難う」

「松本君」

ここで若菜の声がした。

「矢吹さん？」

「ちよつとこつちへ来て」

声がした方を向くと若菜がにこりと笑つて立っていた。そのうえで手招きをしていた。

「潮騒買ったんだけれど」

その三島の代表作の一つである。気持ちのいい恋愛小説である。

実は三島は恋愛小説を得意としていた。昭和の武士は意外と恋愛が好きだつたのだ。

「読んでみない？」

「いいね、それ」

笑顔で彼女の誘いに応える。

「それじゃあ」

「ええ」

「ちよつと御免」

彼は真に顔を向けて言ってきた。

「悪いけれど」

「あ、行けよ」

真はそんな彼を笑顔で送り出す。

「俺は漫画でも読んでるからな」

「うん、それじゃあ」

彼はそのまま若菜の方へ行つた。真は楽しく話をはじめた二人を見ながら本当に机の中から漫画を取り出した。週刊の漫画雑誌であった。

それを開きながら尚志達を見る。そのうえで一人呟く。

「愛は勝つってやつかな、どんな苦労にも」

何となく自分もそれをしてみたかった。今自分の前でにこやかに話をする二人を見てそう思った。そう思わせるものが二人にはあったからだ。

愛は勝つ 完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7767c/>

愛は勝つ

2009年6月23日10時34分発行